

61.21 ✓

風 韻

第
24
号

(昭和六十年
度)

神
戸
大
学
能
楽
部

風 韻 第 24 号 目 次

◎ 所 感	師 匠	藤井 久雄	3
◎ 宇治先生から藤井先生へ	会 長	荒川 祐吉	4
◎ 先 輩 登 場			
◦ 感激の一瞬	旧 1	藤井 茂	6
◦ 「海外生活と日本文化」	特別会員	井川 一宏	7
◎ 学 生 投 稿			
◦ 天 朗	L 3 6	桑江 朝教	8
◦ 風韻会に入って	P 3 6	伊藤由美子	8
◦ 茶房“たむたむ”	P 3 5	松見 京子	9
◦ 無 題	E 3 5	芦田 孝明	10
◦ 四年間を振り返って	J 3 4	山名 紳一	11
◦ グリーン仁丹	J 3 4	宇佐美嘉人	12
◎ 決算報告書（昭和58年度，昭和59年度）			13
◎ あしあと（昭和59年度）			14
◎ 昭和59年度秋季大会番組			16
◎ 役員紹介			18
◎ 幹事長になって	T 3 5	堀内 克己	18
◎ 昭和59年度（第6回）OB会報告			19
◎ 伝 言 板			19
◎ O B 通 信			20
◎ 神戸大学能楽部名簿			21
◎ 編 集 後 記			22



姨 捨 …… 藤 井 久 雄



O B 会



春合宿

所 感



師 匠 藤 井 久 雄

一昨年夏、宇治正夫師の御来訪をうけ、神大謡曲部の稽古を引受けてくれぬか、とのお話がありました。神大風韻会は宇治師とは一心同体と申してもよく、風韻会あつての宇治師であることは誰の目にも明らかであります。私はこの突然の寝耳に水とも申すべき御申入れに驚きました。五十年も手塩にかけられた歴史ある神大風韻会、その二代目とも申すべき師匠に、不肖私を推挙して頂いたことに、その責任を感じ、私如き…とてもとても、と御辞退申し上げましたが、たつてのお望み、是非引受けよとのお話で、ともかく一応お受けさせて頂きました。

宇治正夫師は神戸観世会の長老で、戦前から御じつ懇にしていただき、何事にも一見識をもって筋を通され、そのお人柄に敬意を表

しておりました。右の次第で風韻会の皆様にはご不満の方もあることと存じますが、稽古の方法には人それぞれの行き方もあり、お互いの気持がわかる迄にはある程度のかかることと思ひますが、これはお互いの辛抱です。稽古に参上してから二年足らず、休みも多くなつた回数も少なく、殊にシーズンには約束の土曜日には勝手することも少なからず、まことに申し訳なく思ひますが、幸ひ生徒さんが皆熱心なので、そのみか私としては楽しみであります。何とか宇治師や先輩諸氏のご期待に添ひ、せっかく御推挙いただいた御厚意に報ひ、風韻会の歴史を汚さざるようつとめたいと念じております。謡の道歌に

舞二年、太鼓三年、笛五年、鼓七年、謡十年、と言ひますが、謡に味がつくのは二十年三十年の年期が肝心です。これも真面目に稽古したときの話です。若い学生さんは先づ正確な謡が謡えるようにと心掛けて欲しいものです。正確な謡に磨きがかかつてうまい謡になります。最初から、うまい謡を心掛けてはいけません、師匠の教える正確な謡を覚えることに努めましょう。何卒宜しく御願ひします。謡の道歌に、舞二年、太鼓三年、笛五年、鼓七年、謡十年、と申しますが、謡に味がつくのは二十年以上は必要です。しかし、これは若い学生さんには無理な話です。学生さんは、自習の時間が多しいものです。合宿練習で達者に謡えるようにはなりますが、悪い癖がつくのもこの時ですから注意して下さい。師匠の教える正確な謡を覚えることにとめて下さい。

何卒宜しく願ひします。

宇治先生から藤井先生へ

会長 荒川 祐吉

今はもう、随分旧聞に属することとなりましたが、御承知のように、宇治正夫先生には、五十年にわたり、わが神戸大学観世流謡曲部風韻会の師匠として、この道に志してくる学生の指導に当られ、単に技倆の面のみでなく、生活の基本にまで触れる深い御教導を賜わり、あまりにも偉大な御足跡を残されました。われわれは、神大風韻会五十周年記念に際し、先生御指導の下、輝かしい、又忘れ得ない会を持つことができ、また、神戸大学当局も、特に永年の御功績に対し、感謝状と記念品を贈呈して、深甚の謝意を表わした事は既に御報告申し上げたところであります。

その後、先生は、師匠御引退の意を表明されましたが、直ちに御継者を種々の考慮から決定する事ができないまま、御高令の先生に引続いて御指導をお願いし続けて参りました。藤井茂前会長、私、米花稔OB会長、先輩有志が何度も相諮り、宇治先生にも直接いろいろ御意向を拝承しつつ、御継者の選定に長い時間をかけてまいりました。というのは、半世紀にわたって御指導頂いた風韻会は、宇治先生と全く不可分であり、従って後継の先生は、まず宇治先生の御意向により決定すべきであり、また宇治先生の御意向をよく承け理解して頂ける方であればならないと考えたからです。この間のいろいろな事態の進行については、詳細な御報告は省略させていた

だきたく存じますが、宇治先生には、本当に長い間、測り知れない御心労をおかけいたしました。御息女のみつ子様朝子様の御力添えもあり、漸く、宇治先生のお口から、藤井久雄先生にお願ひする外はないという御意向を伺うことができたのが、昨年の初頭位であったと思います。この御意向をうけ、私共は、早速直接藤井久雄先生にお願ひに参上しようとも考えたのですが、宇治先生は、この件は自分が直接出向いて話すと仰せられ、御足の悪い宇治先生には大変な我々としては、宇治先生の御意向を有難く拝承し、お待ちする外ありませんでした。

ところが、天の恵みといましようか、昨年四月一日、たまたま私が御稽古に、宇治先生宅へ午後二時頃参上いたしました処、藤井久雄先生が御来訪になっており、宇治先生からは、「先程、神戸大学の件につき、自分からお願ひをした処、心よくお受け頂いた」と告げられました。本当に幸運なめぐり合わせで、私は早速、その場で改めて、四月から神戸大学の謡曲部の師匠をお願い致したい旨言上いたしましたところ、藤井久雄先生には、「誠に思い掛けないことと驚いている。しかし大変光栄である。嬉んでお引受けする」というお言葉を賜りました。

長年の懸案が、これでやっと解決したわけで、心の重荷がとれ、誠に有難く存じくれぐれもよろしく願ひ上げ、正式の御挨拶は改めて藤井久雄先生宅へ参上して申上げる事とし、その日は辞去しました。早速諸先生方、OB有志、学生幹事長に報告、連絡し、一日おいた四月三日、藤井茂前会長、私、幹事長の馬島君三名同道にて熊内町

のお宅へ伺がいました。改めて、藤井久雄先生に拝顔し、今後の御指導をお願い申し上げます。先生には心よくお承諾賜りました。早速その場で、何日から大学で稽古をはじめるか、その日取りの打合わせまでしていただき、四月二一日を初稽古日に御指定いただきました。この日の感激は、藤井茂先生の文に詳細に記されていますので、ここでは細々としたことは申述べません。

藤井久雄先生は、観世流職分として、また神戸観世会前会長として、湊川神社内に能楽堂（神能殿）を御建立になる中心推進者として大変な御活躍、遂に立派なものを完成させられ、更には、昭和五十四年、勲五等双光旭日章を受けられ、現在も大変お忙がしい方で、それにも拘わらず、学生の指導を、しかも無償にも等しい対価で、喜んでお引受け下さいました。この有難さは、とても筆舌に尽せるものではありません。当日、私からは、過去宇治先生の下に、「神戸大学風韻会」がどのような組織でどう運営されてきたか、学生達はどんな考え方で行動しているのかを御理解いただく一助として雑誌「風韻」を一揃え持参いたしました。先生からは昭和五十八年十一月に御刊行になりました先生の自叙伝「鶏肋抄―久雄のたわ言―」と題する大部の御本を頂戴いたしました。大変豪華なもので聞くところでは、其後学生達にまで御恵与賜わったときいています。以上のようにして、「風韻会」の師匠交替は、宇治先生の後熱意と、行届いた御配慮、藤井久雄先生の測り知れない御好意と大きな包擁性が相まって、誠に円滑円満に終わりました。これひとえに、両先生のおかげです。どのように感謝申し上げますも足りない思いがいたします。

それから一年、先生には平均月二回は大学へ御指導にみえられ、それだけでは足りないので学生有志は更に別途、先生のお宅まで御指導を受けにいらっているようです。秋の自演会、春の卒業生歓送会も無事終り、クラブ活動の一年が一巡しました。藤井久雄先生の御指導のもと、謡も仕舞も舞囃子も、少しづつ新しい色合いが出てきたように思えます。

藤井久雄先生の御高弟であられる吉岡様は、藤井茂前会長と同期の先輩であられ、私達が最初御挨拶に参上して以来、特別の御配慮を賜わり、OB会にも御出席下さって、いろいろお話を伺う機会がございますが、久雄先生の学生諸君への御指導ぶりは、格別熱のこもったものであるとのことです。

宇治正夫先生を師匠とする神戸大学風韻会は、一応その歴史をしくめぐり、クラブとしては連続していますが、新たに藤井久雄先生を師匠とする神戸大学観世流能楽部が充足した形になりました。神戸大学観世流能楽部は、一応の極めて一般的な名称であり、何かよい会名がつけられればよいかと折に触れ考えています。よい案があれば、御提案下さい。また、OB会は、これを機会に、高商、旧制学部まで拡大して御案内を差上げるように昨年から、いたしました。OBの皆様のお気軽な御参加をお待ちしております。

尚終りに些か早いかも知れませんが、私は昭和六十二年、即ちあと二年で停年退官します。その後は現副会長の井川一宏経済経営研究所助教授がお引受け下さることになっています。輝かしい伝統を持つ神戸大学観世流能楽部は、すばらしい新師匠の御指導のもと、ますます発展していくことを念じ、また確信している次第です。

先輩登場

感激の一瞬

旧一回生 藤井 茂

人と人との交わりの中で、一瞬ハッと感激に心を揺ぶられる場面があるものである。わたくしは、最近こうした経験を二度重ねた。その一つは藤井久雄先生をお訪ねした際であり、その二は宇治正夫先生に謡のけいこをして頂いている際のことである。

二

昭和七年以来五十年余にわたって神戸大学風韻会の指導に当たって下さった宇治正夫先生が足が不自由になられ、先生御自身も側近の人々も後継の先生を探す必要を感じていた。荒川祐吉会長もわたくしも後任の先生は宇治先生が選ばれ、先生御自身の口から頼んで下さるのを道と考え、先生の御判断にお委かせしていた。昨年三月末宇治先生が藤井久雄先生にお会いになり、後を引継いで下さるよう頼まれ、藤井先生が即座に快諾して下さった。荒川会長もたままたその席に列しておられ、両先生に御礼や御願を述べられ、万事極めて順調かつ円満に交替のバトンタッチが行われた。宇治先生の

御誠意と藤井先生の御人徳が美事に実を結んだ場面であったのと、荒川会長からその場の様子を伺ってわたくしも深く感動したことがある。

こうした大綱決定の後をうけて、神戸大学風韻会として藤井先生に御挨拶に伺うことになり、四月三日、荒川会長と学生の幹事長馬島肇一君それにわたくしも加わって熊内町の藤井先生のお宅へ伺った。藤井先生の高弟であり、わたくしとは同期の親友である吉岡篤三氏も藤井先生のお召しによって同席された。藤井先生は宇治社中の風韻会の大会には度々応援に来て下さっていた関係でわたくしは先生には度々お目にかかっており、先生に物が言い易いということもあって、学生のクラブのこととて大家の先生には誠に失礼な程度のお礼しか出来ないことを申し上げ、御理解を得るといふ役目を引受けていた。話の進む中でわたくしは恐る恐るこのことを申し上げたところ、藤井先生は言下に、「そのことは十分に承知しています。宇治先生がおやりになったのと同じようにやらしてもらいます。」と言って下さった。わたくしは先生のこの一言に胸を打たれ、感謝と感激にあふれた。まさしく感激の一瞬であった。多年にわたり学生のために挺身して下さった宇治先生について、学生への理解の深い藤井先生をお迎えすることができて神戸大学の学生諸君は仕合わせである。

三

宇治先生は神戸大学から退かれる前頃からお足が不自由なので各町のけいこ場を撤収されて御自宅でけいこをつけられるようになった。わたくし達が通っていた神戸文化会館練習場のけいこも御自

宅に切り替えられた。わたくしは金曜日に御自宅へ伺っているが、最近では社中の重鎮加藤芳雄氏と時間と曲目を打ち合わせ、先生の前で二人で連吟して聞いて頂いている。先生は御身体の不自由が増すにも拘らず、わたくし共が伺うと、白足袋に袴で正坐して拍子を打って下さる。芸に対する厳しさは失っておられず、近頃耳が遠くなられて時々「聞えませんが」とお叱りを受ける。声を大きくしたただけでは聞きとりにくいらしく、力を一杯こめて謡わなければならぬ。先生に聞いて頂ける謡をと練習に励んでいる。

この間、邯鄲のおさらえをして頂いたが、加藤さんとの気合いが合って、地のところを夢中で謡っていると、突然「大変結構ですよ。よく気合がこもっています」というお声がかかった。一瞬二人ともハツとして謡うのを止めた。一所懸命に謡っているのが先生の琴線にふれたのであろうか。五十三年お教えを受けてきたが、こうした場面は初めてのことです。千金にも代え難い感激の一瞬であった。わたくしは今にして至高の師恩に浴した思いを噛みしめている。

(昭和六十年三月三日)

「海外生活と日本文化」

特別会員 井川 一宏

約十ヶ月の海外出張(米国シカゴ郊外のノースウェスタン大学)を終え、本年二月七日帰神致しました。神戸大学で能楽を指導して下さる先生の交代という大切な時に不在でしたことに對し、深くお

詫び致します。

さて、海外生活の経験を通して感じましたことを述べてみます。百番集は常に待機しておりましたが、開かれることなく日米間を往復することになりました。それでも一度だけ外国で謡曲を口にしました。日本通の外人をパーティに招いた時、結婚式の話題で高砂の一部を紹介したわけです。大変喜んでいただき、私も日本人の証ができたと心密かに感じております。ご承知のように、米国は人種の坩堝であり、アメリカ文化一般はありません。各個人がその継承文化の違いを鮮明にすることにより、それぞれの社会的存在を表明しております。在米の日本人・日系人は、日本に住む人以上に日本文化を取込むことに努力しております。そうしなければ文化をもちない中途半端な存在となって、社会から無視されてしまいます。

このことは、海外に住む日本人だけの問題とは言えないと私は考えております。今後、科学技術の発達と国際交流の発展によって、世界の文化が混合・結合されて、現在の米国におけるように、各個人が自分の文化を主張しなければならぬ時期が来ると思います。日本人と日本文化とは必ずしも結びつけて考えられるものではなくなり、日本文化圏で生活するためには、そのための努力が必要となります。幸い私は、神戸大学の関係の方々のお指導によりまして、細々ながら謡曲を続けさせていただいておりますので、この機会に気分を新たにし、日本文化にふれてそれを身につけることに精進したいと考えております。それによりまして、未来における精神的に満たされた生活に一步でも近づけることができればと、願っております。

(昭和六十年三月二十五日 六甲台にて)

学生投稿

天 朗

L 36 桑 江 朝 教

授業の終了ベルが鳴り出し、教室が人を吐き出し始める。その帰路に着く人波を縫うように橋を越え、六甲台へ向かう。いつもながら息切れのする坂をクリアし、六甲台の校舎のすき間から、六甲の山並みを臨む。

澄んだ空の下、六甲の緑をバックに、古ぼけた部屋群が並んで見える。その最西端に近づくにつれて、朗々とした謡いの声がまるで天から降ってくるかのように、僕を襲ってくる。これはどの先輩の声かな、とあれこれ思いをはせているうちに我が能楽部の部室が目近かになった。

能楽部の部室は、狭い。各大学の能楽部部室すべてを見たことがあるわけではないが、それでも広いとはお世辞にも言えない。また外側から見ると、古いとしか言いようのない姿を呈している。もちろん、伝統があるのは確かだし、それはそれで誇るべき事だけれど、やはりきれいで新しいものを好ましいと感ずる心理からすれば、少しマイナス的印象を受ける。

だが、広くて新しい部屋で練習する能楽部というものを思い浮かべると、何だかさびしい気がする。そんな見栄だけのいい部屋に響

く謡の声は、薄っぺらい感じがするし、第一そんなところから聞こえてくる声を離れて聞いていても、ペンキぬりたてのような部屋を見たら興ざめしてしまう。

やはり、人の息がすぐに感じられ、古臭く少しとぼけた風情のある部屋の方が合っているに違いない。

そんな事を思いながら、部屋の戸口をのぞくと、先程天から襲ってきた声が、一気に体じゅうに炸裂する。かすかによるめきながら今度は僕が天から降らせる番だと密かにほくそ笑む。全く雷神のごとくである。

六甲の山並みと古ぼけた部屋と、そして天から降りそそぐ朗々とした声。この三つが奇妙な三角形となって、僕の生活に楔を打ち込む、そんな毎日である。

風韻会に入っ

P 36 伊 藤 由 美 子

私が能楽部、風韻会に入部してから、一年半が過ぎようとしています。振り返ってみると、いろいろなことがありました。

まず、合宿ですが、まだ入部するかどうか決めかねていた一年生のジュニア合宿に始まって、数回の合宿を経験しました。きびしい練習と規律正しい生活、先輩方の鋭い視点からの批評、反省……。中学、高校と、女子ばかりの文化クラブに所属していた私にとって、クラブ合宿というのは初めてのことでしたので、驚きの連続でした。

反面、「ああ私も大学生になったのだ。」と自覚することもできま
した。また発表会では、広い舞台で一人、仕舞をする緊張感。「途
中で忘れたらどうしよう。まちがったらどうしよう。」その不安は
今でも変わっていません。

そして、私が他の部員の方と違うのは、同学年に、他の同性の部
員がいないことです。それは、クラブの活動を続けていく上で、い
つも最も不安なことです。一度ならず、もうクラブをやめたいと考
えました。しかし、その度ごとに、OBの方や先輩方に、励まし
ていただいて、なんとか、やめずにこれました。私達の学年の部員
は、男子も三人しかいないため、来年は、四人で幹事をとることに
なります。そうなる一人一人の肩にかかる責任は重く、それぞれ
の仕事の量も多いことと思います。しかし、創部以来、五十年を越
える伝統のあるクラブ。何とか守り、育てていかなければならぬ
と思っています。

話は変わりますが、風韻会のよい所は、雰囲気の和やかさ、あた
たかさにあると思います。少人数ゆえの部員相互の接触の多さによ
るものでしょうか。来年以降、多くの新入生が入部しても（そうな
ると嬉しいことです）この雰囲気は、ずっと後にまで伝えていって
ほしいと思います。

茶房 “たむたむ”

P 35 松見京子

クラブと喫茶店——しいては学生と喫茶店は切っても切れない仲
ではないでしょうか。

なぜこんなことを突然書いたかという、七月の初め、私がとて
も大好きだったコーヒーショップが店じまいしてしまったからなの
です。六月の半ば、少し体調をくずしていた私は七月になってやっ
と元気になり、久々にこの店に行きました。すると滅多と店を休ま
ないはずの“たむたむ”（この店の名です）のシャッターが降りた
ままなのです。毎日店の前を通ってみるのですが同じです。やっぱ
り潰れたのかなあと思っているうちに、閉店してしまつたと友人に
教えられました。なんだかとても切ない思いがこみ上げてきました。
それから一ヶ月、そのあとにはお好み焼の店が出来ました。私の思
いに反して現実は厳しい？ようです。

何も潰れてしまつたのは“たむたむ”だけではないのです。クラ
ブの帰りによく立寄つた“ココロ”も無くなってしまいました。下
宿生の大好きなフライヌードルを食べることもありません。コ
ンパの二次会でコーヒーを飲む時も、今では六甲道の方へ行かねば
ならなくなつてしまいました。

私が一回生の時、四回生の先輩に連れて行っていた紅茶文
庫も、ヨーグルトのお店も、今は別のお店に変わってしまいました。

寂しい限りです。

しかし何も潰れるばかりではないと今日知りました。練習の帰りに歩いてハイジの前まで来ると、新しい喫茶店ができていて思わず入ってしまった。今度、昔先輩に連れて行っていただいたように、私もこの新しいお店に一年生を誘ってみようかなと思いつつ、コーヒーを飲みほしました。

無 題

E 35 芦 田 孝 明

時のたつのははやいもので、このクラブに入って二年と少しが過ぎました。つまり私の大学生活の半分以上が過ぎたわけです。

これまでの大学生活を振り返ってみると、その大変大きな部分をこのクラブが占めています。

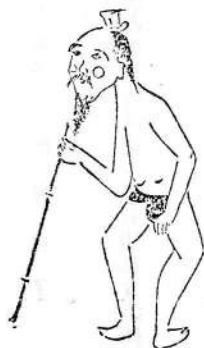
私がこのクラブに入ったきっかけは、大学に入ったばかりの頃、一人でぶらぶらしている時先輩の一人に声を掛けられたことです。何げなしにその先輩についてジュニア部屋に行き、何げなく練習に見学に行っているうちに入部ということになりました。その時は何とも思いませんでしたが、今思えばその出会いが今の生活というものを造っているのだから、それは「運命」の出会いだったのです。

その後、夏休みまでは何もわからないうちに矢のように過ぎて行きましたが、その「運命」の出会いを悔む時が来ました。夏合宿が

やって来たのです。夏合宿に行く前から少しきついとは聞いていましたが、まあそれ程でもないだろうと、いいかげんな気持ちで行き甘さを思い知らされました。そしてそれから自演会までは練習がいやでたまりませんでした。でも、その頃からだんだんこのクラブというものがわかって来たように思います。

そして二年になり、一気に雑用が増えて忙しくなりました。この頃から一段とクラブの存在というものが大きくなって行きました。二年は忙しいうちに過ぎて行きました。この一年は今思うと超スピードで過ぎて行きましたが、その時は色々クラブというものがわかってくるにつれて色々苦しいことも増えて長い一年だなと思っていたのですからおかしなものです。

それから三年になり、ついにクラブの中心とならなければならぬ幹事学年になってしまいました。幹事学年にはなりましたが、まだ下級生気分が抜けません。これではいけないと思いつつも今だにクラブの中の自分というものがあまりわからずにいる今日この頃です。これからも自分のできることを確実にやっていきたいと考えています。それが充実した大学生を送るということにつながると思います。約二年後、いい大学時代だったなあと思えたら最高ののですが……。



老 體

かんしん遠目

四年間を振り返って

J 34 山名 紳一

大学生活もあと残すところ半年となり、いま時の早さをつくづくと感じています。そして四年間の大学生活を振り返ってみて、改めてクラブの示める割合の大きさに驚いています。

四年前、新入生として本学に入学した時は、大学生活に対する期待と不安で一杯でした。そんな中でクラブとの出会いは本当に幸運だったと思います。その時は「能のクラブ」というと何か偏屈な人の集まりのように思えたのですが、先輩の謡に憧れて思い切って飛び込んだのでした。

一年生の中に五回の発表会がありました。その中でも秋季発表会は神戸大学風韻会の五十周年記念の会でもあり、大勢のOBの先輩方も出席してくださり大層な盛会でした。一年生だった僕も五十周年という歴史の長さを感じたものです。また三回生の先輩の舞囃子を見て「笛の音だけで舞うなんて、さすが先輩だなあ。」と改めて先輩を尊敬したり、(恥しいことに)会の後の懇親会でつぶれて、OBの方に介抱して頂いたのもこの時でした。

二年生になる頃からやっと謡や仕舞が面白く思えて来ました。ツヨ吟やヨワ吟の節の上げ下げがある程度わかるようになります。その曲の情趣や人物の心情を考えるようになったからです。緩急のつけ方も少しわかって来ました。宇治先生のお宅に学生が何うようになっ

たのもこの頃です。それまでは先生が部屋まで足を運んで下さったのですが、御高輪の先生にはやはり六甲の坂はきついということ。学生が逆瀬川のお宅に何うようになりました。稽古のたびに一度に大勢の学生が押し掛けるわけですが、お宅ではいつも温かくもてなして下さり、皆で有難くお茶などを戴きました。

二年生の夏合宿で練習し秋季発表会で舞った「屋島」の仕舞は、今でも僕が一番好きな仕舞です。残念ながら発表会での出来は自分ではあまり納得のいくものではなかったのですが、型の多い「屋島」を何とか克服しようと必死に取り組んだ三ヶ月でした。また、この頃から舞台に対する欲も出て来たと思います。

三年生はいよいよ幹事学年として自分たちがクラブの中心となるわけですが、一つの組織を動かすということの難しさを痛感した一年でした。特に幹事長の馬島君の苦勞は大変なもので良く頑張ってくれたと思います。一つの発表会を開くだけでも準備、連絡、練習、当日の手配などかなりの仕事になります。各人が分担された仕事を責任を持って行い、その上で他人に対し協力するという姿勢が必要です。そうやって全員が頑張った会が、無事終了した時の満足感は今でも忘れられません。

三年生の四月からは藤井久雄先



女舞

生に稽古をみて頂いていますが、いつも本当に丁寧に教えて下さいませ。できるだけ先生を真似るように頑張っているのですが、全然近づけていないという状態です。あと半年ですが少しでも近づけたらと思っています。

四年間のクラブでの思い出は、一杯あり過ぎてとても書き尽くせません。クラブとしての活動以外のいわば遊びの面でも楽しい思い出ばかりで、コンパ、麻雀、ハイキング、スキー、先輩達との夜遊び等々僕の頭の中にしっかりと残っています。

たくさんの思い出を作ってくれたクラブに今は感謝の気持ちで一杯です。

グリーン仁丹

T 34 宇佐美 嘉人

昭和五十九年度より、私たちは藤井久雄先生に教えて頂くようになりました。先生には大変熱心に、手とり足とり教えて頂いており、お稽古の度に感激することしきりであります。

さて、その熱心さもさることながら、私達の喜んでいることに、学生に対して先生が大変気さくなお人柄だということですね。そんなエピソードを二、三紹介したいと思います。

秋季大会にそなえ、先生の御自宅で舞囃子のお稽古を見て頂いていたTさん（ペンギンみたいな子です）。先生に、此処彼処と型の位置を教わっている最中、先生はTさんの後ろにつくと、「君はい

つもこんな風にして歩いているのかね？」と、首を斜め45度下に傾け、両手を少し広げビョコビョコと真似して歩き出されました。次の瞬間笑いこぼる部員の中、Tさんは一人、前よりも一層下を向いて、赤面していました。

これも、先生の御自宅で、幹事長のH君が（こう書いてしまっは、誰であるかは明らかですな）、舞囃子の曲を幾つか選んで頂いて、さてどれにするか唇に手をあてもごもごぶつぶつ悩んでいると先生曰く、「君は家へ帰ると、お母さんにあまえてばかりいるんだらう。」鋭いというか何というか、これがスバリ当たっているんです。当のH君はニヤニヤしながら、「うーん、否定できないんで……。」なんて、あっさり認めました。

先生によれば、僕たち三、四年生は、「古い人」なんだそうです。（全くあつというまに年をとっていくんだ。）

僕と川原君はお互い、「あの人に似た人」と呼ばれています。そして次期幹事長の桑江君は、吉川晃司（部室のポスター）にそっくりなんだそうです。（僕だって高校時代に地下鉄の中で「田原俊彦に似てる」と「女子高生」に言われたことがあるんだ。）

ある日、部室でのお稽古のとき、先生は何かをなめていらっしやいました。ちょうどその時、先生の近くに居たのが下宿生で、物欲しそうな顔をしていたんでしょう。「君たちも食べなさい。」と違って差し出されたのはグリーン仁丹でした。

昭和58年度決算報告書

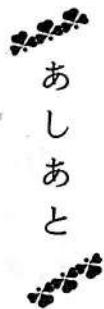
自 昭和58年1月1日
至 昭和58年12月31日

収 入		支 出	
今期徴収部費	310,700.-	先生謝礼	174,000.-
大学援助金	60,000.-	自演会	276,500.-
先輩寄付金	271,460.-	歓送謡会	152,000.-
広告料	18,000.-	三大学発表会	27,680.-
発表会役料	247,000.-	学連役料	50,000.-
その他	54,774.-	学連費	28,000.-
繰越金	725,266.-	新入生歓入行事	12,000.-
		印刷費(風韻,番組)	147,000.-
		通信・交通費	106,150.-
		文具費	34,059.-
		渉外費	313,000.-
		雑支出	68,898.-
		来期繰越金	624,613.-
	<u>1,687,200.-</u>		<u>1,687,200.-</u>

昭和59年度決算報告書

自 昭和59年1月1日
至 昭和59年12月31日

収 入		支 出	
今期徴収部費	260,860.-	先生謝礼	204,000.-
大学援助金	52,000.-	秋期発表会	213,000.-
先輩寄付金	2,450.-	歓送謡会	163,000.-
風韻広告料	8,000.-	三大学発表会	30,000.-
発表会役料	244,000.-	学連春季舞台料	10,000.-
その他	111,285.-	学連費	28,000.-
普通預金より	200,000.-	通信・交通・渉外費	80,425.-
繰越金	3,713.-	文具費	37,681.-
		雑費	103,123.-
		来期繰越金	13,079.-
	<u>882,308.-</u>		<u>882,308.-</u>



あしあと

昭和五十九年度 A17 馬島肇 一

三月

二日(金)～八日(木) 春合宿

於 香川県小豆郡内海町 民宿「きらく荘」

練習曲 一年「嵐山」「箴」「鞍馬天狗」「小鍛冶」「殺生石」

「東北」「養老」。二年「安達原」「井筒」「鉄輪」「高砂」

「放下僧」「三井寺」「屋島」。

十一日(日) 慰労ハイク 於布引

十七日(土) 歓送謡会 於 学生会館六階ホール

舞囃子「松虫」(谷口)「融」(松元)「富士太鼓」(萩野) 他

素謡八番、仕舞三番、連吟二番。

宇治先生と舞台を御一緒させて頂くのも、これが最後となりました。以後宇治先生は、神戸大学風韻会の師匠としての御立場を退かれ、四月からは、神戸在住の観世流職分、藤井久雄先生に御指導して頂くことになりました。

四月

上旬～下旬 新入生勧誘

男子四人、女子二人の新人が入部

二十九日(日) 新歓ハイク 於 須磨方面

五月

四日(金)～六日(日) 旧三商大交歓会 大阪市大主催

十八日(金)～二十日(日) ジュニア合宿 於 摩耶山王蔵院

練習曲「大仏供養」「土蜘蛛」「橋弁慶」「吉野天人」

二十七日(日) 藤井歓謡会春之会出演 於 湊川神社神能殿

三年有志で連吟「楠露」

六月

二日(土) 新歓コンパ 於 国玉会館

二十四日(日) 学連春季大会 於 山本能楽堂

仕舞六番、連吟二番、合同物への参加など。

七月

一日(日) 神戸三大学合同発表会 於上田能楽堂 神戸大主催

神大からは、素謡一番、仕舞十七番。他、合同素謡や狂言など。

七日(土) 謡納会

八月

二十日(月) ～二十七日(月) 夏合宿

於 滋賀県高島郡今津町 民宿「よしのや」

練習曲 一年「菊慈童」「小袖曾我」「狸々」「田村」「竹生島」「経正」「羽衣」「富士太鼓」「紅葉狩」。二年「敦盛」「鶴飼」「善知鳥」「賀茂」「清経」「班女」「船弁慶」「熊野」。

九月

一日(土) 第六回風韻会OB会 於 三宮スカイサントリ

九日(日) 京都老人大学他主催「謡曲と琴の会」出演

二、三年有志により、仕舞五番を発表。

十一月

十日(土) ～十一日(日) 六甲祭 焼鳥屋「狸々」出演

二十四日(土) 五十九年度秋季発表会 於学生会館六階ホール
舞囃子「玄象」「荒木」「敦盛」「梅園」「小袖曾我」(内藤・山名)「芦刈」「馬島」「紅葉狩」「橘高」「草子洗小町」(田岡)
他、素謡八番、仕舞十八番、連吟二番。

十二月

二十二日(土) 謡納会、のちクリスマスコンパ

合宿や発表会の時、そしてふだんの練習の時も、御参加あるいは御指導していただいた先輩の皆様、ありがとうございます。
今年度は、師匠の交代というあまりにも大きなできごとがあり、私たちが幹事にとってはまさに激動の一年でした。風韻会は今や変革期を迎えていると思われれます。私たちは幹事を退き、今後を後輩に託すわけですが、この混沌とした状態を乗り切ることができるか、それはわかりません。先輩の皆様、これからも御指導御支援よろしくお願い申し上げます。

写真撮影スタジオ
証明書写真
出張証明写真

サクライ写真館

阪神御影駅北100m TEL (078)851-2739



3 カンタベリー三番街

プレイ・パブ カンタベリーハウス

昭和五十九年十一月二十四日(土) 十時三十分始

於 神戸大学 学生会館六階ホール



五十九年度秋季発表会番組



菊 慈童 衣笠賢一

△ 舞囃子 √

芦 刈 馬島肇一 山本哲也 野口維夫

紅葉狩 橘高みゆき 山本哲也 野口維夫

玄 象 荒木隆三 大倉源二郎 野口維夫

川原 健

清 經 堀内克己 芦田孝明

富士太鼓 桑江朝教 村上卓生
衣 伊藤由美子 橋本博江

鶴 龜 △ 素 謡 √
村上卓生 伊藤由美子

△ 仕 舞 √

田 村クセ 衣笠賢一

狸 々 高野 豊

屋 島 川原 健

草子洗小町 伊藤由美子

高 砂 松見京子

羽 衣クセ 桑江朝教

小 督 村上卓生

松 虫クセ 芦田孝明

蟬 丸道行 橋本博江

松 風キリ 船寺佳奈子

賀 茂 田岡昌美
橋本博江 松見京子

敦 盛 梅園健治 山本哲也
大倉源二郎 野口維夫

草子洗小町 田岡昌美 山本哲也
大倉源二郎 野口維夫

小袖曾我 内藤茂 山本哲也
山名紳一 大倉源二郎 野口維夫

竹 生 島 梅園健治

清 経キリ 堀内克己
天 鼓 宇佐美 嘉人
忠 度 木下宏志

藤 戸 伊藤欣二 藤井英一

玉之段 梅戸由香里
俊成忠度キリ 武内博教
野宮 桑名浩之

安達原 戸次威左武 門之園辰志
佐々木肇宏

千手 米花稔 藤井茂
荒川祐吉

附 祝言

終了予定十七時

主催 神戸大学能楽部

協賛 神戸大学能楽部OB会

幹事長になって

T 35 堀内 克己

役員紹介

幹事長	T 35	堀内克己
副幹事長	P 35	橋本博江
渉内	E 35	芦田孝明
渉外・文総	E 35	川原 健
会計	P 35	松見京子
連盟委員	E 36	村上卓生

幹事長になってはや九ヶ月。何の明確なビジョンもなく過ごして参りましたが、一年生が四名も入部してくれて、まだまだこのクラブは、やっていける状態にあります。おかげで今年も自演会をすることができて、うれしく思います。またクラブとしても、今までさほど問題もなく、あと三ヶ月この調子でいけたらいいと思います。去年は「風韻」が出なくて、このクラブもそろそろ終わりかと思われた方もいらっしゃると思いますが、そんなことはありません。まだまだ続きます。ですからOBの方には、これからも援助・助言などしていただくこととなりますが、よろしくお願いします。

昭和五十九年度（第六回）OB会報告

と き 昭和五十九年九月一日（土）

と ころ 三宮交通センタービル六階 スカイサントリー

会 費 八千円

参加者 藤井茂、米花稔、荒川祐吉各先生、井口宗敏、吉岡篤三

豊島又衛、西尾雄一、伊藤欣二、杉本孝昭、里井三千雄

林哲夫、原敏郎、森沢展裕、有田栄一、大良晃彦、

佐々木肇宏、近藤哲久、段野治雄、戸次威左武、

松村有芳、吉留敦子、山口剛司、反田雅之各先輩

多数の先輩方の御参加をえて、盛大に行なわれました。次回もど
うぞ気軽に御参加ください。

会 計 報 告

収入の部		
会 費	186,000.-	
繰 越 金	116,840.-	
	<hr/>	302,840.-
支出の部		
会 場 費	206,470.-	
通 信 費	24,530.-	
写 真 代	2,690.-	
雑 費	1,380.-	
保 留 分	67,950.-	
	<hr/>	302,840.-

伝 言 版

○ 昭和五十九年度

十一月 木村邦子さん（旧姓佐野・二十九回生）

御結婚！

心からお喜び申しあげます。

○ 昭和六十年卒業生就職決定！

木下 宏志 武田薬品工業

桑名 浩之 教員

武内 博教 東京スタイル

梅戸由香里 株式会社東洋情報システム

船寺佳奈子 岡崎国立共同研究機構基礎生物

学研究所

既に御活躍中の皆さんですが、重ねてお喜び申し上げます。

楽楽OB通信 楽楽楽楽

伊藤欣二氏(旧十二回生)

会の写真を有難うございました。御発展を祈り上げます。

遠藤 隆氏(新二十七回生)

遠藤寿子さん(旧姓飯田・新二十六回生)

風韻会を卒業して、はや五年、いやもと六年?時のたつのは早いものです。日本に戻って一度学生の発表会を見てみたいものです。

反田雅之氏(新二十九回生)

発表会ごぶさたしていますが、練習がんばってね!

松元伊知郎氏(新三十二回生)

毎日、暑い日が続いていますが、みんな元気で頑張っていますか
私は夏休み中、子供たちの水泳指導のため、ほとんど毎日出勤しています。水泳のおかげで体は、まっ黒(アー痛い!)

萩野千夏さん(新三十二回生)

元気にまじめに、そしてシビアに練習に励んで下さい。

この他にもたくさんのお便りを頂きありがとうございました。
これから、近況・御意見等ございましたら、お寄せ下さい。

良 心 的 な 店

定食・丼物・うどん

鉄板焼・お好み焼

ひ ろ

大道学園西100米下る
TEL 811-2844

喫茶と御食事

ニュー 浜

神戸市東灘区御影本町4丁目8番17号
TEL 078(811) 6944

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

編集後記

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「風韻」二十四号をお届けします。発行に際しまして、原稿をお寄せ下さいました皆様方に深く御礼申し上げます。

編集者の怠慢から、発行が大幅に遅れまして誠に申し訳ございません。昨年は「風韻」が発行されず、また今年もかと、心配された方も少なくないと思われませんが、また例年通り発行してゆくつもりですので、今後ともこの雑誌「風韻」をクラブとの、また現役クラブ員との対話の場として御利用下さい。

師匠が宇治正夫先生から、藤井久雄先生へと、名称も風韻会から能楽部と変わり、クラブ自身も変わりつつあるのは否定できませんが、底に流れているものは昔も今も同じものだと思います。いつまでも、クラブの良き伝統を守ってみたいと思います。

最後に三十三回生の方、お預りいたしました原稿を、こちらの不手際により、載せることができませんでした。深くお詫びいたします。

<p>昭和60年11月25日 印刷 昭和60年11月30日 発行</p> <p>風 韻</p> <p>発行所 神戸大学能楽部 神戸市灘区六甲台町</p> <p>印刷所 みなと出版印刷株式会社 神戸市中央区脇浜町 1丁目2番2号 電話 2 5 1 - 6 2 1 7 (代)</p>	<p>最新式電子編集組版機</p> <p>雑誌からコピー印刷まで……</p> <p>みなと出版印刷KK</p> <p>神戸市中央区脇浜町1-2-2 西山ハイツ (株)神戸製鋼本社東隣り 阪神電車岩屋駅西200米</p> <p>(078)251-6217(代)</p>
--	--

登録  商標

**御菓子司
常盤堂**

神戸市東灘区御影中町
電話神戸(851) 4 6 7 7 番

古書買受・事務用品
(御報 参上)

小牧文具書店

神戸市東灘区御影本町2丁目15-25
電話 851-3286 阪神御影駅南東50m